

上伊福・南方(済生会)遺跡現地説明会資料

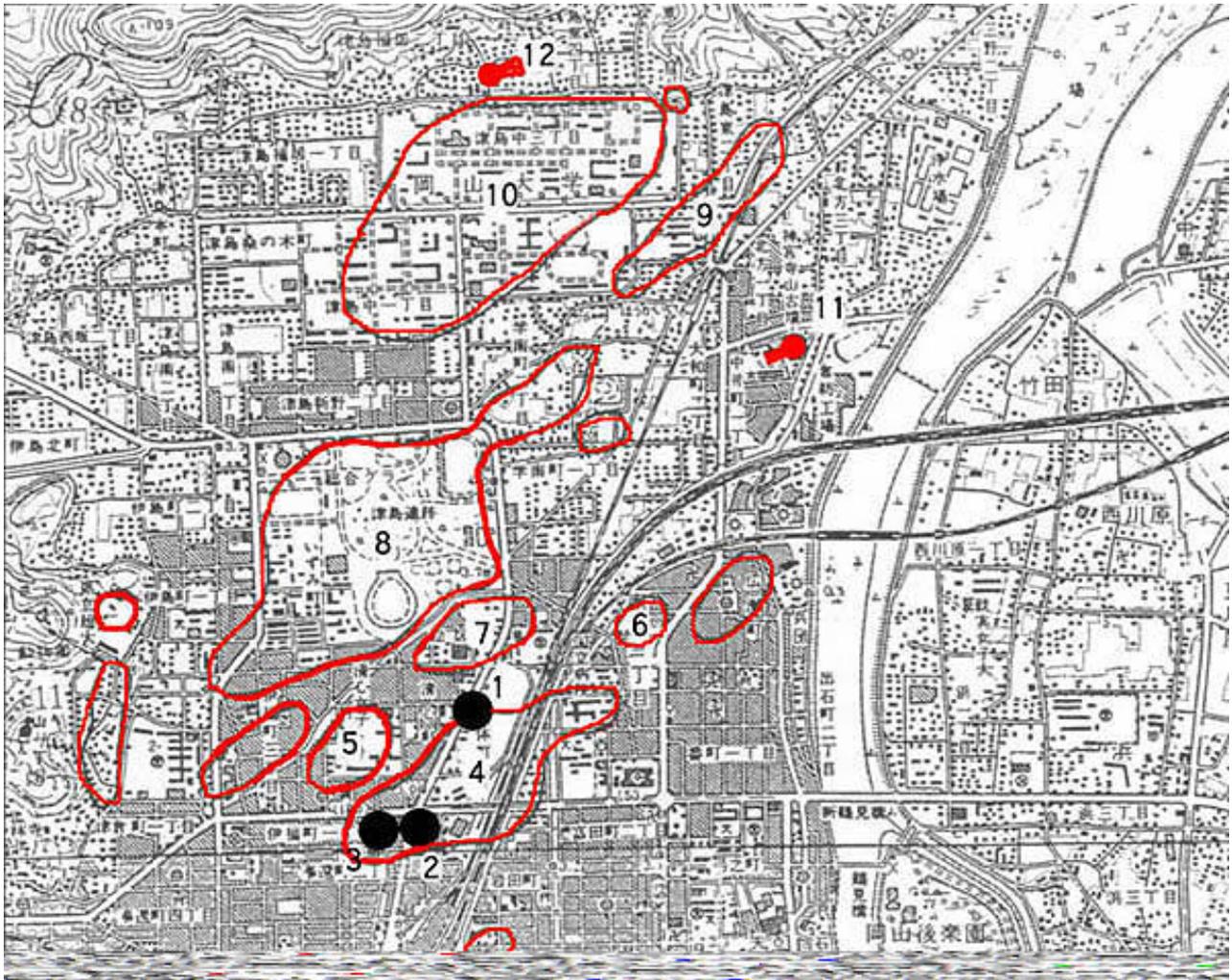
平成5年9月25日

岡山市教育委員会

1.はじめに

発掘調査をしている場所は、国道53号に隣接する岡山市国体町地内にあたり、旧字名をとって蓮田調査区と呼んでいます。周辺は弥生時代中頃を中心とするムラ跡として古くから知られており、これまでも新幹線側道、国立病院、清心女子大学などの整備に伴い発掘調査が行われてきました。現在も継続中ですが(1)隣接する南方(国体開発)遺跡の発掘調査でも、多量の遺物が出土したほか弥生時代以降のムラとその周辺のようなすが明らかにされつつあります。

今回、済生会病院の立て替えに伴って、岡山市教育委員会では昨年4月から発掘調査を実施してきました。これまでに蓮田南調査区(現看護婦寮)、立花調査区(管理棟、立体駐車場)の調査を終了しています。この蓮田調査区(ライフケアセンター予定地)では今年2月から、約1000㎡を対象に調査を進めてきました。この度、調査も一定の成果をあげることができましたので、現地説明会の実施できなかった蓮田南、立花I調査区の概要も含めてご報告します。



1 蓮田調査区(ライフケアセンター) 2 蓮田南調査区(看護婦寮) 3 立花1調査区(管理棟・立体駐車場)

4 南方遺跡 5 上伊福九ノ坪遺跡 6 南方釜田遺跡 7 絵図遺跡 8 津島遺跡 9 津島江道遺跡 10 津島岡大遺跡 11 神宮寺山古墳

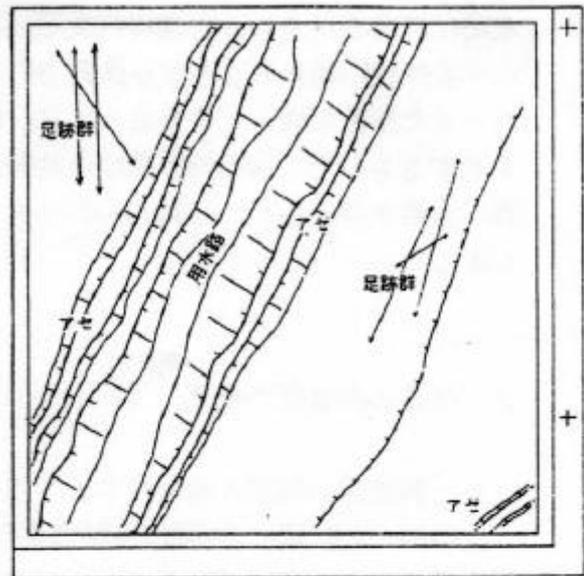
12 塚の本(おつか様)古墳

1 1993年(平成5年)9月現在

2. 蓮田南調査区、立花1調査区の概要

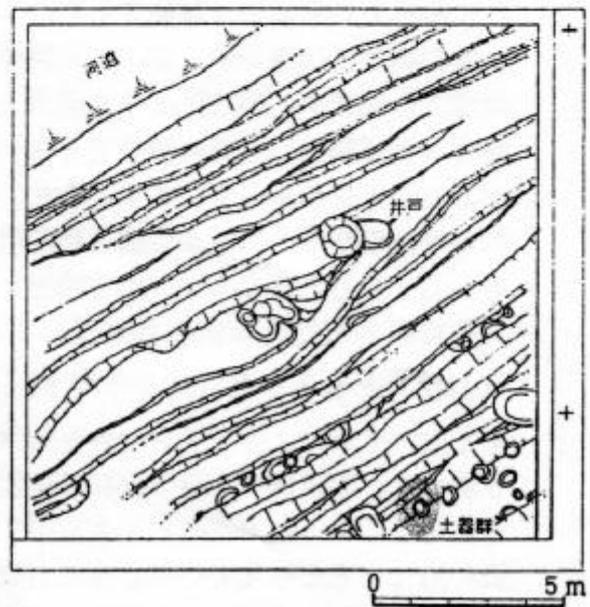
蓮田南調査区(第2図)

蓮田調査区はムラのある中洲状の高まり(微高地)の縁辺部にあたり、調査区の北西端から西側の道路部分にかけて川が流れていたようです。多数の弥生時代中期を中心とする用水路や井戸などが見つっています。用水路は洪水によって運ばれてきた砂によって埋まっており、そのたびに少しずつ場所を変えながら何度も掘り直されたようです。古墳時代以降は調査区全面にわたって水田になっており、古墳時代の水田では人と牛の足跡が見つかりました。



立花1調査区(第3図)

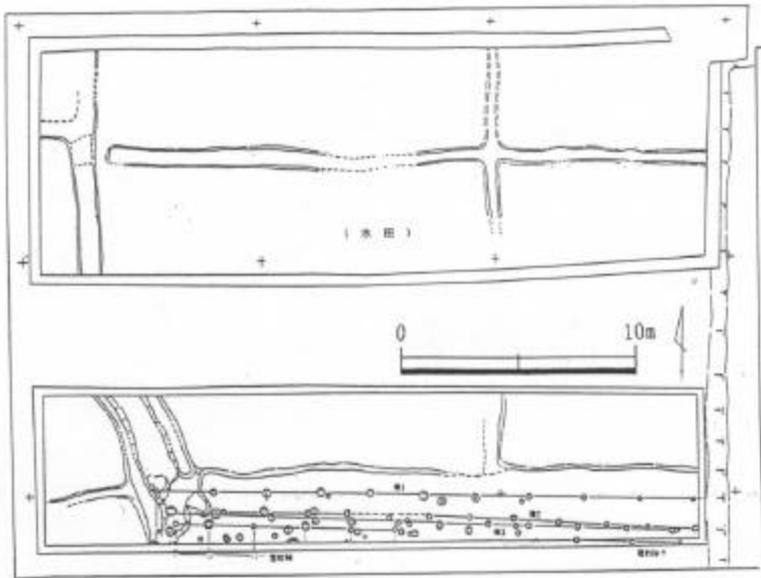
調査区の南西側が微高地に、北東側が谷状の低湿地になっていました。弥生時代には前期末から中期中頃(約2000年前)にかけて、この微高地側にムラが営まれていたようで、貯蔵穴、用水路、柱穴、土壌墓、ゴミ穴などが見つかりました。遺物としては、多量の壺・甕・高杯などの土器類、やじり・石庖丁(穂積み具)・磨製石斧・石剣などの石器が出土しています。中にはヒシャク形の土器や祭りに使ったものと思われる分銅形土製品といったものも出土しました。また土壌墓には人骨が残っていました。弥生時代中期の終わりごろから後期にかけてのものは見つかりません。



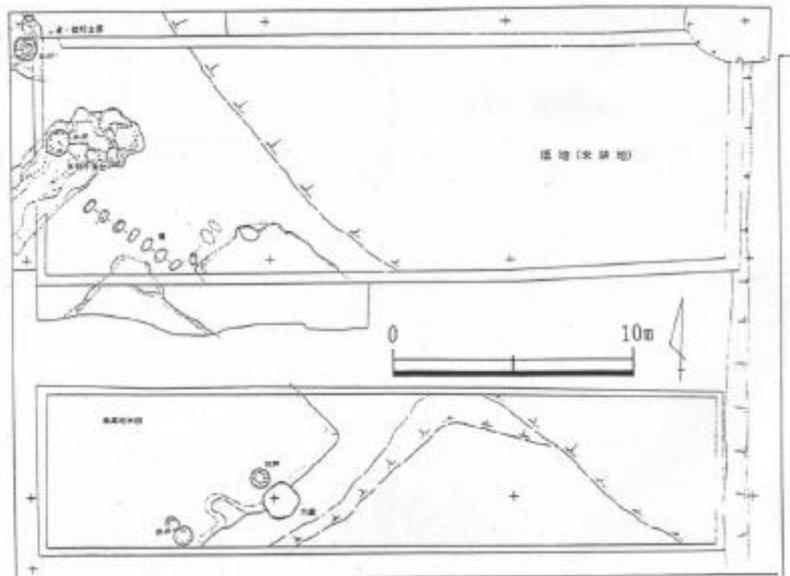
第2図 蓮田南調査区の遺構
(上 古墳時代・下 弥生時代)

古墳時代前期(約1500年前)には、弥生時代と同様に微高地側にムラが営まれていたようで、井戸などの遺構が見つっています。井戸の中からは数個の完全な形の甕・壺のほか、木製の作業台、工具の柄に巻いたものと思われる樹皮が見つっています。また調査区の南西側は微高地を10数mの幅で開墾して水田にしているようです。しかし、低地側はまだ水田になっておらず、この低地が水田に開発されるのは古墳時代後期以降のようです。

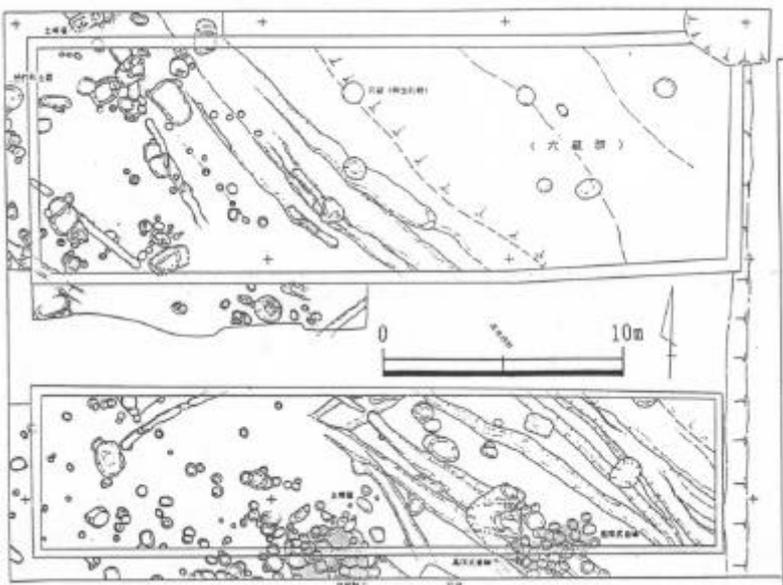
平安時代の終わりごろから鎌倉時代(12～13世紀)には南側の高まりに柵を巡らせた屋敷が建っていたようです。柵は調査範囲内で見つかった屋敷地と水田を画するもので、水田の区画は東西南北に整ったものでした。遺物としては、土師器(素焼きの土器)、移動式のカマド、土ナベ、緑釉陶器、輸入陶磁器などが出土しました。



平安～鎌倉時代



古墳時代前期



弥生時代

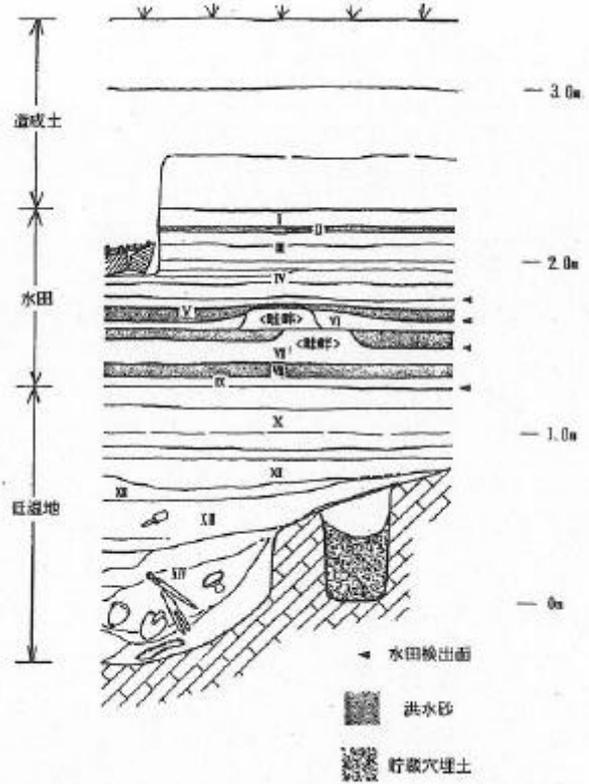
第3図 立花1調査区の遺構

3. 蓮田調査区の概要

a 調査区の地形と各時代の様子

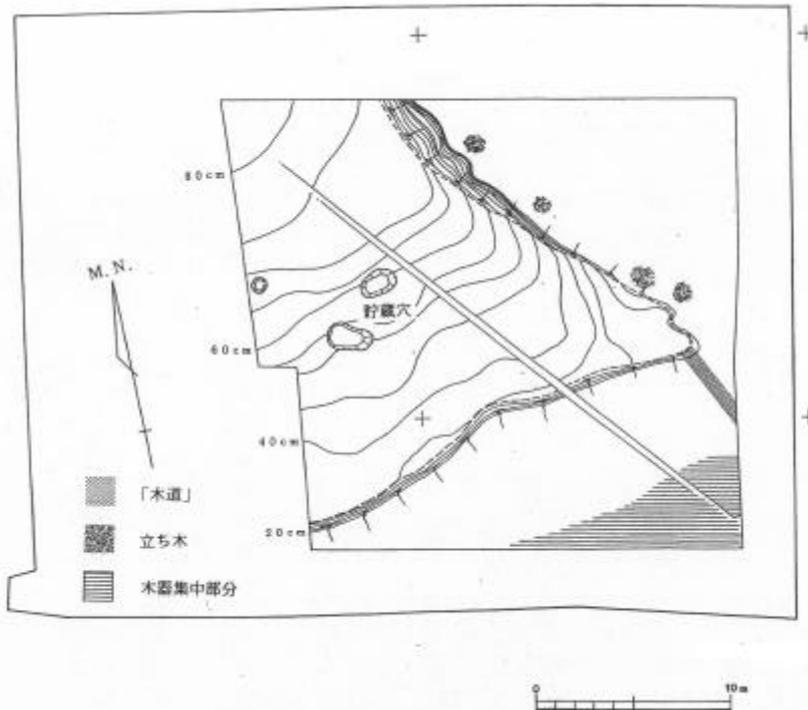
上伊福・南方(済生会病院)遺跡周辺の旭川西岸平野は、現在は都市化が進み岡山市街地の中心となっていますが、今から約 2000 年前、弥生時代ごろには小高い中洲状の高まり(激高地)の間を何本にも分流した旭川がクモの巣のように流れているという景観でした。

蓮田調査区は蓮田南、立花 I 両調査区のような微高地ではなく、微高地と微高地の間の低地です。調査区より北東側と南側が微高地になっており、南側の微高地は南方(国体開発)遺跡の調査でその一部が確認され、弥生時代前期から中期のムラがあることがわかっています。また、その微高地の南東側にはさらに川があり、その対岸は現在の JR 線から国立病院付近までにおよぶ微高地であり、弥生時代中期を中心とする大きなムラ(南方遺跡)があります。



第 4 図 蓮田調査区の基本層位模式図

調査区内では北東側の微高地の先端が伸びてきており、その両側、南東側と北東側はもともと川だったようです。この川は、縄文時代から弥生時代のはじめ頃まで流れていたようですが、弥生時代の中頃には流れなくなり沼のような状態になりました。南東側の川跡の沼には南側のムラから土器や木器、石器、建物の部材などいらなくなったものがたくさん捨てられました。北東側の川跡には、微高地の縁辺に沿って木が生えていたようで、立ち木の根元の部分そのままの状態で見つかりました。また微高地の先端は人が生活するには低すぎるようで住居跡などは見つかっていませんが、次のような遺構が見つっています。(第 5 図)



第 5 図 蓮田調査区の遺構 1 (弥生時代)

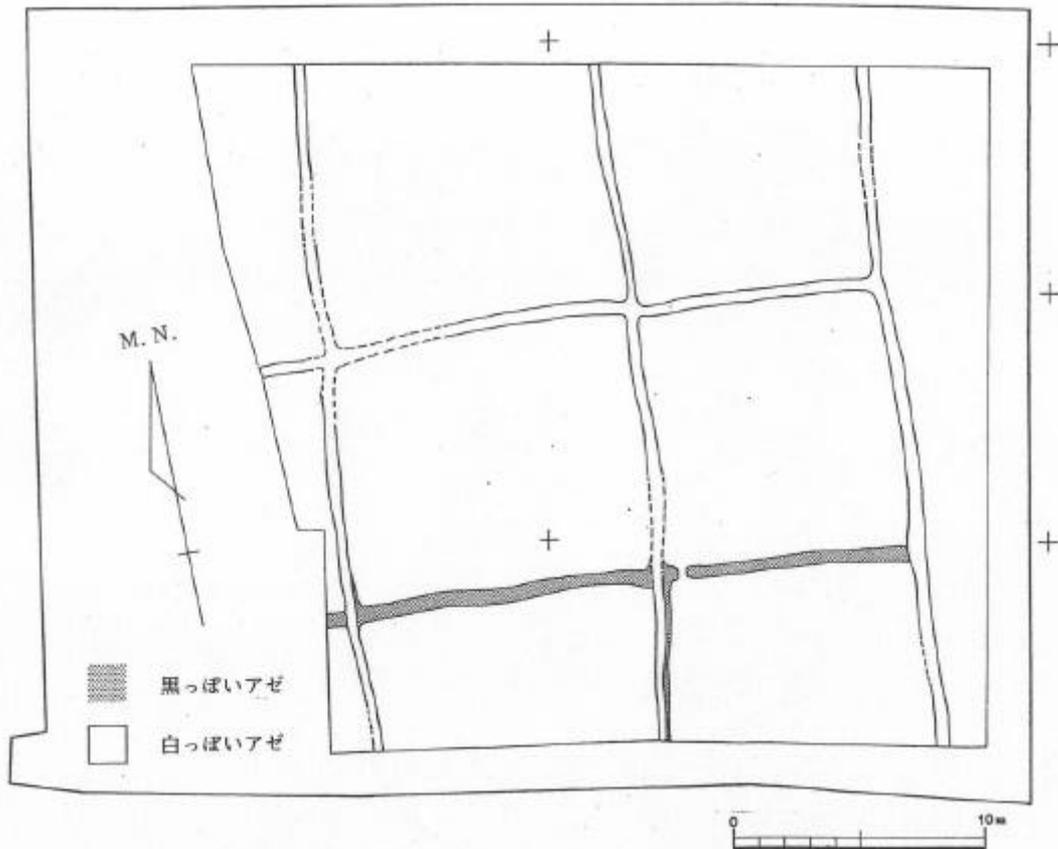
「木道」:微高地の一番先っぽにはこの微高地から南側のムラへつづく沼をわたる「木道」がつけられています。「木道」は横木をわたした上に、いらなくなった建物の部材などを並べ、杭で動かないようにしただけの簡単なものです。

貯蔵穴:木屑などがつまった貯蔵穴が数基あります。

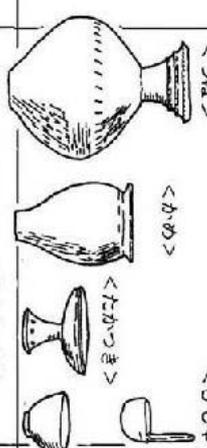
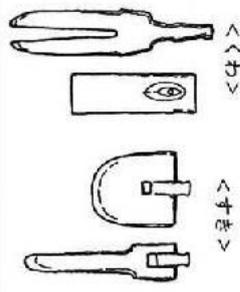
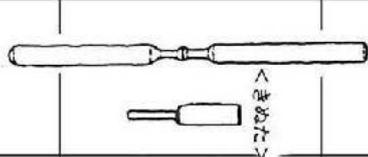
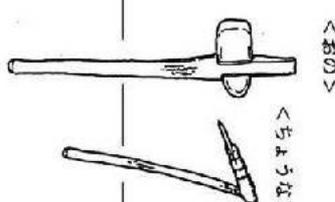
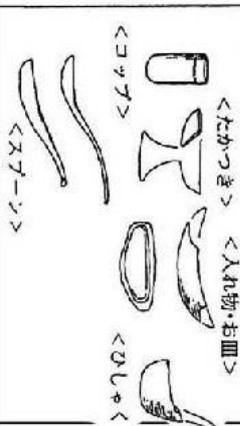
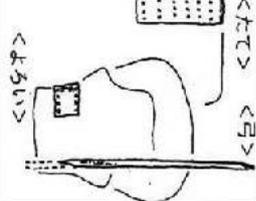
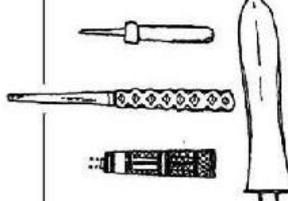
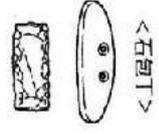
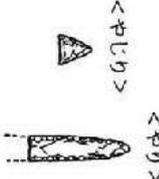
時代が下るにつれ、この沼も洪水で運ばれてきた土砂や湿地性の堆積物によって埋まっていきます。しかし、この間調査区の場所は微高地の背後にあたり水はけが悪いためか、水田などに利用されることなく葦原のような湿地状態のままのようです。

この調査区の場所が水田に開墾されるのは平安時代の終わり頃になっての事のように見えます。この水田は東西南北に整然とした区画をもつもので、条里制水田といえます(第6図)。

条里制とは、約600?四方の正方形に区画(里)した中をさらに1町(約100m)四方に36等分(坪)し、さらに1坪を10等分するもので、水田の質をランク分けして、税収の基本になっていました。調査区では、南北方向のアゼは約10m間隔で、耕作土より下の白っぽい土を盛りあげてつくっています。これが1坪を10等分する単位だと思われます。そして、東西方向にはアゼを、やはり約10m間隔に耕作土と同じ黒っぽい土を盛りあげてつくっています。これは水田に水を張るためのアゼだと思われます。この条里制の区画はこの周辺が市街化する直前までつづいており、現在でも道路などにその名残を止めています。



第6図 蓮田調査区の遺構2 (平安～鎌倉時代)

	米つくりの道具	加工の道具	食器や煮炊き・貯蔵の道具	戦争や狩りの道具	お祭りの道具	
土器			 <p><つぼ> <かめ> <たかつき> <ひしゃく> <たかつき></p>		 <p><分銅形土製品></p>	
木の道具	 <p><<わ>> <すき></p>	 <p><きね> <きねた></p>	 <p><おの> <ちような></p>	 <p><たかつき> <入れ物・お皿> <コップ> <ひしゃく> <スプーン></p>	 <p><たて> <弓> <よらい></p>	
石の道具	 <p><石包丁></p>			 <p><やりり> <やり></p>		
鉄の道具			 <p>鉄の道具で加工した跡</p>			

b. 出土遺物

蓮田調査区では、特に南東側の川跡から、南側のムラから捨てられたものと思われる土器や石器などの道具がたくさん見つかっています。中でも、絶えずじめじめした環境であるため、普通は腐ってしまつて残らない木の道具類がたくさん見つかったことは注目されます。これらの遺物は土器の年代観から弥生時代中期頃のものと考えられます。

木の道具には、`鎌(くわ)`、`鋤(すき)`、`杵(きね)`、`碇(きねた)`などの水田

を耕したり、`取れた稲を加工する道具`。石斧や手斧(ちような)の柄といつた木を切つたり加工したりする道具。コップ、スプーン、高杯(たかつき)、ボウルのような入れ物やお皿、`ヒシヤク`などの日用品。盾(たて)、漆塗りの筒(よるい)、弓などの狩りや戦争の道具。お祭りのための道具などのほか、`建物の部材と思われる加工された材木`もあります。お祭りの道具には、`どのように使つたものかわかりませんが、`武器の形をしたもの、`刻み目やえぐりをいれた棒`、`たくさんの模様を刻んだ飾り板`などがあります。